

今日から夏休みが始まります。皆さんへのメッセージは学校だよりに載せていますので、先生から配られたら一読してください。

今日は、来年の2月に河内長野市内の小中学校で、自分の好きな本の紹介をする「ビブリオバトル」が開催されます。大会名は、「B1 Best Book Battle」と銘打って、中学校は2年生の中から選抜して大会に出ることになりますので、私も好きなというか、感動した本を紹介してみます。

今から10年以上くらい前だと思いますが、元々ノンフィクション（実際にあったことや記録に基づいた作品）が好きで、歴史ものや史実に基づいて書かれた本が特に好きでした。

東大阪市に記念館がある、司馬遼太郎さんの本もたくさん読みました。

今回紹介する「ジーン・ワルツ」という海堂尊さんの作品は、フィクションですが医療にまつわるものが題材となっています。チーム・バチスタの栄光やジェネラルルージュの凱旋、ブラックペアンなどが映画化されています。

物語は、大学医学部の女性医師が、依頼を受けてもう病院を閉めることが決まっているマリアクリニックという産婦人科で、最後の妊婦さんたちを出産までの経過を書いた本です。

皆さんがお母さんから生まれてくる確率はもの凄い奇跡みたいなものと本には書かれています。お母さんの卵子の500分の1、お父さんからは5億分の1の狭き門を突破してきた遺伝子のエリートたちと本には書かれています。毎日学校に来ていることは、こんな奇跡のめぐりあわせから始まっているのです。

マリアクリニック唯一の医師、理恵。マリアクリニックは閉院がきまっているのです。そして看護師も妙高みすずひとりだけで、通う妊婦は4人しかいません。

- 1.甘利みね子 男子1人を出産後 第2子妊娠中
- 2.青井ユミ 19歳 髪はオレンジ、鼻と唇にピアスをしている若い女性未成年。
- 3.荒木浩子 39歳 不妊外来に通院5年
- 4.山咲みどり 55歳 体外受精経過観察 双子を妊娠

さて、話を本の内容に戻しますと、

4人の妊婦の中で、2人の女性に焦点を当てます。

1人は19歳の髪はオレンジ、鼻と唇にピアスをしている若い女性です。最初は子どもが嫌いなのか、生みたくないのか中絶を考えていましたが、診察を受けた女性医師に医療ビデオを見せられてからは、人工中絶の怖さを知り中絶のことは言わなくなりました。

もう一人は55歳で双子を妊娠した女性です。55歳という高齢で体外受精を受けたことで、自分の体を代理母出産として提供しているのではないかと疑われています。

19歳の女性は、自分の体の中でだんだん赤ちゃんが大きくなっていくのですが、診察の結果、先天性疾患で腕がないことが分かりました。女性は自分のおなかをぼんぼん蹴っている赤ちゃんの腕が生まれつきないことが分かった時は、妊娠が分かった時にはあれだけ中絶しようとしていた気持ちが、おなかの中で大きくなってくる赤ちゃんの力で女性の気持ちを一変させ、赤ちゃんを産む覚悟ができました。

最終的には、19歳の女性も55歳の女性も無事出産することができました。19歳の女性は生まれつき腕がない赤ちゃんを抱えて、仕事もしなくては生きていけません。幸いにも出産したマリアクリニックで働くことになり、そのクリニックで受付や電話の取次ぎなどをしながら、子どもを育て働けるようになりました。

子どもが生まれるということは、大変奇跡的なことであり、出産に関しては命がけで臨むこととなります。また、子どもを育てるということは、24時間勤務することとなります。皆さんも何年後には、親になる人もいるでしょう。子どもを育てるには責任が伴いますので、親になる覚悟ができてから子どもを授かり育てていくことが大切です。

今まで読んだ本の中で奇想天外のストーリーであり、また、子どもが生まれる奇跡や育てる覚悟、そして赤ちゃんていいなと思い、唯一読んでいて涙がこぼれた本でした。図書館にこの本がありますので、読んでみてください。この本の続編のマドンナ・ヴェルデもあります。